Communication Design in Medical Facilities

医療環境のデザインを考える

芸術文化学部＋医学部共同プロジェクト

富山大学芸術文化学部教授　　武山　良三

プロジェクト概要

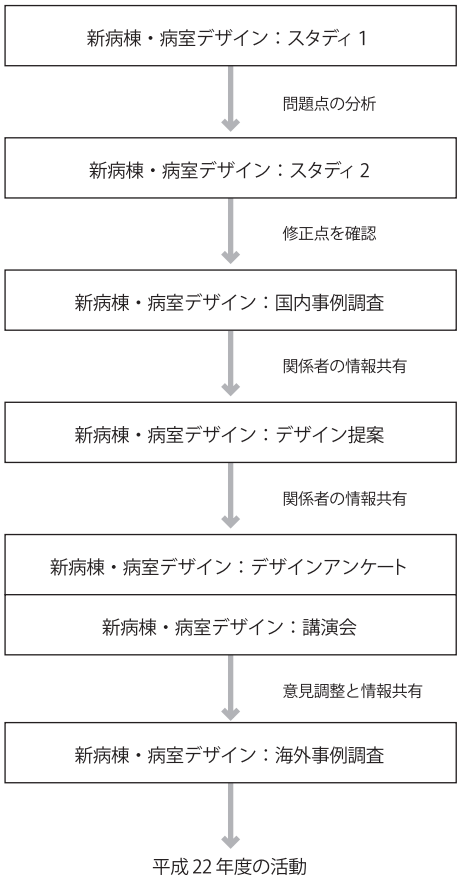
医療環境におけるコミュニケーションデザインは、患者さんが病院に対して信頼感を持って気持ちよく治療に専念できる環境を整えることを目標に、さまざまな要素を総合的に用いて行います。各種表示類のように文字はもとより、壁や床の色や素材、ベッドや収納の形や使い勝手など感覚的な表現も含めて伝えることが求められます。

平成20年度は、富山大学附属病院の現状を把握するためサイン計画と診察室・待合室の環境を中心に調査を行い問題点を整理しました。加えて専門家を招いての講演会や事例調査を実施しました。その結果多岐にわたるコミュニケーションデザインの中から着手すべきテーマを、①待合い環境の改善、②サイン計画の再構築、③病棟の色彩計画を優先させることにしました。方向性のキーワードには、①富山大学附属病院の理念、②記憶を刻んだものの活用、③木質系材料の導入、④採光や照明効果の活用、⑤癒しを感じる色彩計画、⑥自然環境の再認識、を挙げました。

平成21年度は、上記を踏まえて建設が進む富山大学附属病院の新病棟を具体的な課題として次の項目について検討を行いました。

A. 病室のデザイン
（一般4床室・特別個室　小児科4床室・特別個室）
- 内装　　：壁面、天井、床、手すり、照明等
- 医療設備：医療ユニットパネル
  （医療ガス、非常用電源等）
- 備品　　：ベッド、サイドテーブル、椅子、机、
  テレビ、掲示板等

B. サインデザイン
- 総合案内サイン：診察科目や病院・フロア全体の
  施設配置がわかるもの
- 利用案内サイン：診察時間や各種手続き、
  注意事項等
- 誘導案内サイン：各受付等施設や部屋への誘導
- 室名表示サイン：その部屋の名称を表示
- 医療用サイン　：ナースコール、看護支援情報
- その他　　：コミュニケーションボード



医療介護支援ピクトグラムの導入

医療支援ピクトグラムは、急性期病院での患者支援のために開発されたコミュニケーションツールです。

・そのベッドに横たわる患者さんが
・治療しながら
・できるだけいつもと同じ生活を送ることができるために
・そこに集まる人たち (病院全職員、患者・家族、面会者) が
・何らかの支援 (声をかける、人を呼ぶ、介助する) を
・しやすくする (情報共有)、したくなる (ピクトグラム) ツール

ことを目的に、開発者の横井郁子氏や実際に導入されている旭川赤十字病院の前田章子氏のアドバイスを受けながら、富山大学附属病院の状況に合わせた仕様を検討します。

新病棟病室デザインスタディ 1

富山大学附属病院では、平成22年度に地上7階、地下1階建て病床数320の新病棟が建てられます。竣工後は順次旧病棟と診療棟を改修し平成29年度に全面的なリニューアルが完了する予定です。従って、新病棟のデザインは新しい富山大学病院のモデルケースと位置づけられます。

新病棟の病室は大きく分類して4人部屋と個室があります。3階は小児科用として特別な仕様を用いるため合計4種類のデザインが求められました。空間や備品の大きさや素材感を具体的に把握するためまず4床室と個室各1室のモデルルームを仮設しデザインスタディ 1 として検証を行いました。医師、看護師、病院職員からヒアリング等の調査を行ったところ、・それぞれはデザインされているがバラバラな印象である、・収納が大きすぎるのではないか、・やや狭い感じがする、・「新しい病室」という感じがしない、などの意見が出されました。

新病棟病室デザインスタディ2

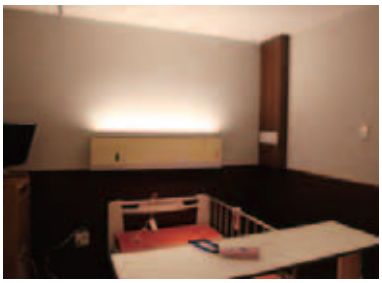
デザインスタディ 1 から、統一感のあるデザインが求められること、そのためには基準になる色彩や素材を絞り込むことが必要であると確認されました。そこでまず新病棟を含めこれからの富山大学附属病院の環境があるべき理念を「高度な医療とホスピタリティのある療養環境の構築」としました。地域の中核病院として、専門性と総合性を併せ持つ質の高い医療を提供すると共に、患者さんの立場に立って「心地よさ」や「満足」を感じてもらえる環境の整備を目標としました。病院はどうしても治療に不安や痛みが伴うところです。また、食事や外出なども制限されるなど自由にできない不満が伴います。それだけにホスピタリティを重視し患者さんの気持ちが癒される環境を整える必要があります。従来の富山大学病院のイメージをレベルアップし、「良くなった」と感じられるよう、控えめにしながらもポイントはしっかりデザインをすること、竣工時がベストではなく使っていく中で向上するデザインを目指しました。

4 床室ベッドまわり
それぞれ必要なものであるが、既製品を集めただけではどうしてもばらばらな印象になってしまう。収納も大きく窮屈な感じ。

4 床室壁面
木質系材料を腰板に加え壁面にも用いる一方、壁面の備品を整理しすっきりした印象を与えられるよう変更。照明は間接光を用いてやわらかな雰囲気を演出。

個室ベッドまわり
4 床室同様さまざまな大きさや素材の備品が混在しており新しくなった印象が乏しい。差額を支払って入る特別感も欠けている。

個室ベッドまわり
個室も同じく木質系の材料を用いながらより落ち着いた雰囲気をつくるため焦げ茶色（ウォルナット系）とし、壁はこれに合わせてグレー系の壁紙、床もブラウン系のグレー色にした案。

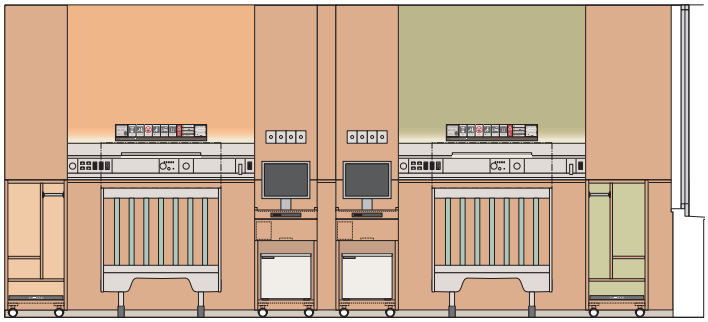


国内外の調査

プロジェクトでは、国内外の先進的な事例調査を行いました。国内では旭川赤十字病院（写真左）と九州大学病院（写真右）を視察しました。共に既存の病棟を改修しながら新館を新築している事例で、富山大学附属病院の置かれている状況に近いことから、改修の具体的なポイントについて関係者の共通認識をつくることができました。

デザイン提案：入院室

入院室のデザインにおいては、明るく心地よい療養環境を目標に、木目を多用しながら心休まる空間づくりに努めました。収納ケース、床頭台なども木目色調を合わせた上で、木目の高さやラインレベル、医療ユニットパネルとの納まり等を調整して、統一感のある環境デザインを目指しました。

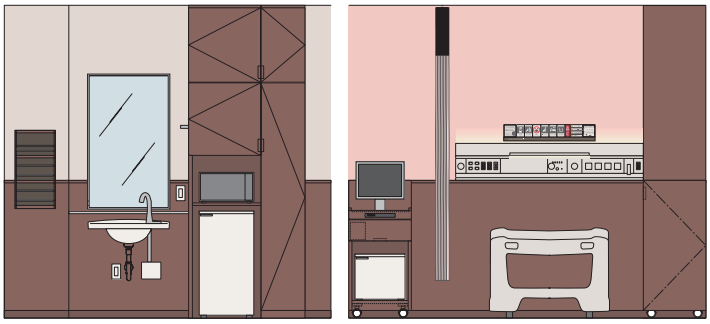


小児４床室

小児病室においては、２色のテーマカラーを展開し、医療パネルユニット上部に２色のクロスカラーと、収納ケース内部にも同等色のカラーを選定。

小児個室

小児個室では、４床室とは違った２色のテーマカラーを連続する病室において、交互に展開して各個室違った印象となるようなデザインカラーを選定。

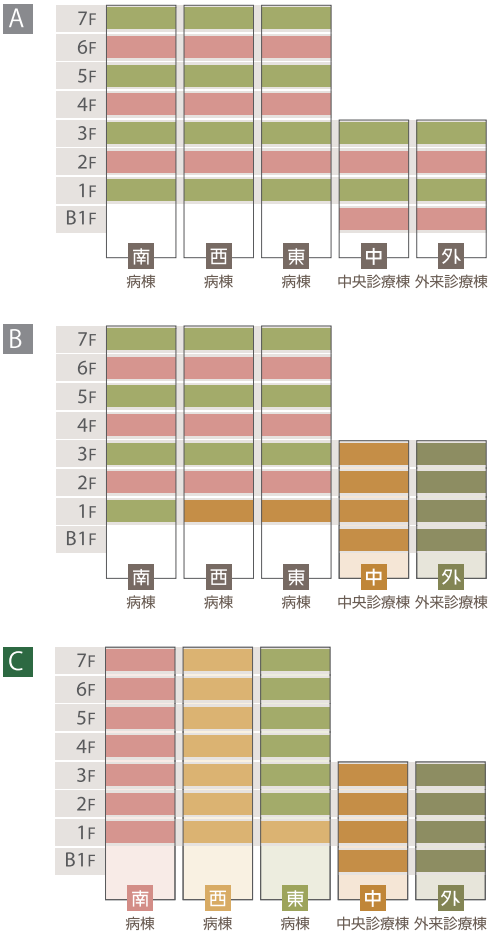


デザイン提案：色彩計画

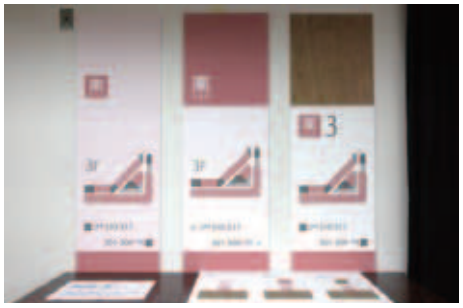
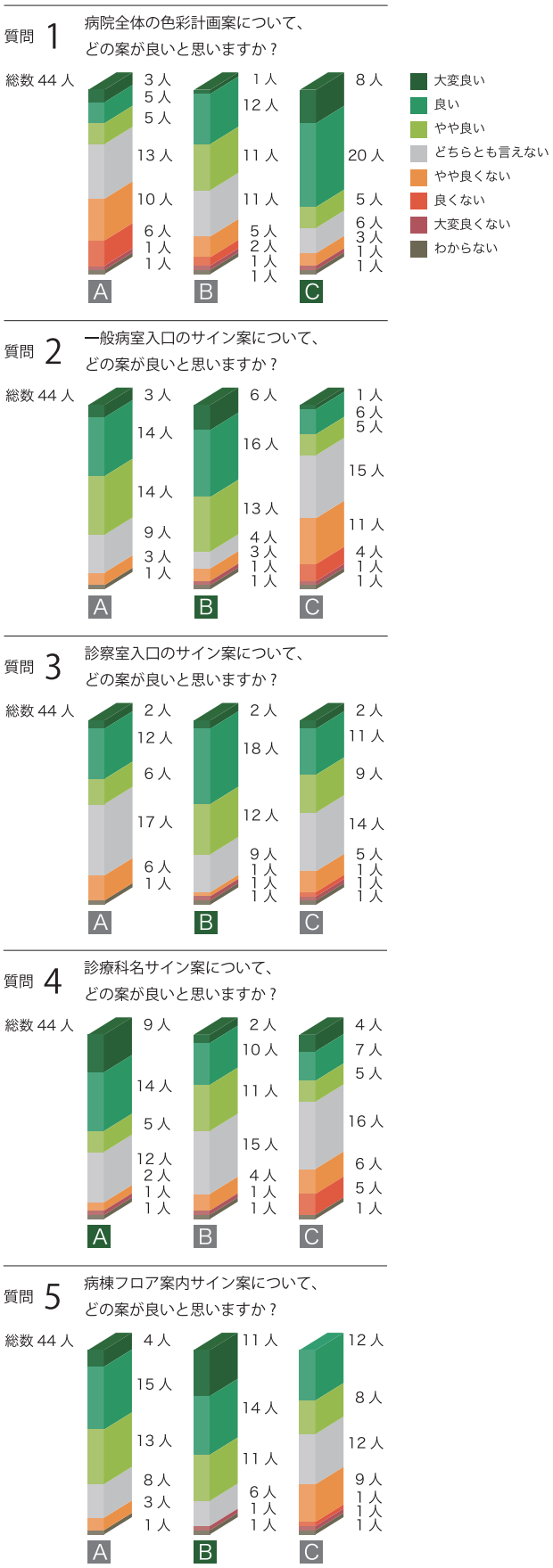
新病棟の工事は先行しますが、今後は引き続き既存東西病棟の改修工事が行われ、その後は中央診療棟、外来診療棟と順次工事が行われます。

そうした計画を見越した中で、病院全体のカラー計画を立案しました。A案は偶数階、奇数階でフロアカラーを設定した場合、B案は病棟はフロアカラーで外来系は棟別で色分けを設定した場合、C案は大きな５つの棟ブロックに色を設定した場合です。

色彩計画案はサイン案と共にアンケート調査を実施し、当事者である病院関係者からの意見を聴取しました。



デザイン提案：サイン計画

サイン計画は、まず各施設の呼び方の見直しから行い、次にどのような経路で案内すべきかという動線計画を作成します。その上で色彩計画などと関連づけたサインシステムを構築します。

今回はそのためのスタディとして、ゾーンカラーをどの程度展開するか、番号によるシステム展開をどのように行うか、文字の表現にどの程度のプライバシーを加味するかなどを検証項目として設定しアンケート調査を行いました。